

## 戦前期における日中民俗学の関わり

王 京（北京大学）

学問としての民俗学はナショナリズムの興り、国民国家の形成を背景としている。中国と日本において民俗学は共に「西洋の衝撃」に直面して社会が急速に変わりつつあった時代に胚胎しており、さらにほぼ同時代的に進行している。日中両国民俗学発展史の比較研究のため、戦前期の両国民俗学の関わりの様相を整理する必要がある。

### 一、中国民俗学史

#### 1、北京大学時代（1918—1926）

内容：「歌謡研究会」、歌謡・方言収集、国学門、風俗調査会、器物収集  
出版物：『北京大学日刊』、『歌謡』週刊、『北京大学研究所国学門週刊』  
中心人物：周作人、顧頡剛、江紹原

#### 2、中山大学時代（1926—1930）

内容：欧米理論、「民俗学会」、雑誌と叢書刊行、民俗学伝習会、物品陳列室、各地分会、雲南調査  
出版物：『民俗』週刊、「民俗学会叢書」  
中心人物：顧頡剛、鍾敬文、楊成志

#### 3、杭州時代（1930—1935）

内容：昔話研究、新年風俗、「中国民俗学会」、雑誌刊行、海外との交流、各地分会  
出版物：『民俗学集鐫』、『民間月刊』、『芸風』、『婦女と児童』、『孟姜女』  
中心人物：鍾敬文、婁子匡

### 二、戦前日中民俗学の関わり

#### 1、北京大学時代：周作人（1885-1967）

日本留学：1906-1911、文学・ギリシア語、1909年の前と後  
日本民俗学体験：柳田国男の業績と民俗学の動向についての了解→「遠野物語」1931年  
帰国後の活動：民俗学提唱、童謡・歌謡収集、柳田国男への関心、郷土研究と人類学  
中国への影響：「民俗学」という言葉、日本情報（江紹原と南方熊楠の交流）、外国理論  
日本への影響：日本文化の理解者として

#### 2、中山大学時代：何思敬（1896-1968）

日本留学：1912-1915 図案デザイン、1916-1926 一高予科、二高、東京帝大社会学

日本民俗学体験：岡正雄、『民族』同人との交流、寄稿→「支那の新国学運動」1926年  
帰国後の活動：欧米理論の紹介、理論的文章、「民俗学」は独立科学か  
中国への影響：欧米理論導入の口火、「民俗学」用語の定着、日本情報（顧頡剛、鍾敬文）  
日本への影響：柳田国男の連帯感、民俗学会の期待

### 3、杭州時代：鍾敬文（1903-2002）、婁子匡（1905-2005）

日本留学：鍾は1934-1936独学、婁はなし  
民俗学体験：鍾は北京大学時代から関わり、中山大学時代は事務方として民俗学会の重  
要人物、1928年以降、上海—杭州に、省立商業中学、浙江大学  
婁は中山大学時代関わり、寧波で活動、杭州に鍾と合流  
日本との関わり：「中国民俗学会」と日本「民俗学会」の交流、佐々木喜善  
日本への影響：資料提供（松村武雄、西村真次、松本信広、石田幹之助）、刺激（関敬吾）

### 三、戦前期の関わりについて

中国人日本留学の意味  
関係の個人依存性  
柳田国男との関連の薄さ  
何より戦争の影響

### 四、それ以降の状況

戦時下中国民俗学の状況  
奥地避難と民族学への傾斜  
占領地区では日本人の研究と欧米人の研究

### 戦時下日本民俗学の中国への関わり

戦争の進行と動員  
中国での研究活動：太田陸郎、大間知篤三、直江広治など  
柳田国男先生古稀記念事業と敗戦

### 戦後関係の再開

台湾：1950年代、「国際東洋学会議」、婁子匡・林衡道の訪日  
大陸：1980年代、「日本口承文芸学会」訪中、鍾敬文

【資料1】遠野物語は深い印象を与えてくれた。文章は勿論、民俗学の豊かな趣味も示してくれた。当時の日本において、大学の中では坪井正五郎の人類学講座があり、民間では高木敏雄の神話研究があるが、民俗学の方は甚だ低回しており、柳田氏こそこの種の学問を発達させた者である。しかし、なぜか彼は民俗学ではなく、始終「郷土研究」と称している。1910年5月に柳田氏が刊行した『石神問答』は34通の往復書簡からなり、村々で信仰される神道を議論するものであった。6月に『遠野物語』を刊行した。この二書は、民俗学界の陳勝呉広であるに過ぎないが、実はこの種の学問の基礎を作ったのである。文献上の列挙推測だけではなく、実際の民間生活から着手しているので、すがすがしい活力があり、自然に人の興味を惹きたてることができる。1913年3月、柳田氏と高木敏雄が共同で月刊『郷土研究』を編集し、この（民俗学の）運動は正式に始動した。その時、石橋臥波が多くの名流や学者と連絡を取り、民俗学会を組織して季刊を発行していたが、内容的にあまり充実ではなかったようだ。石橋の著した暦、鏡、厄年、夢、鬼などに関する著書は、私はみな購入しているが、しかしなんとなく要領を得にくい感がある。或は文献に偏っているせいかもしれない。高木はかたわらこの民俗学会にも参加している。後に、彼は何かの不满があり、あまり関わらなくなってから、『郷土研究』は柳田一人の仕事になったと言える。この種の事業はだいたい持久しにくい。読者は始終600余名に留まっていたそうだ。第4巻が出た後、ついに1917年の春に停刊が宣言された。しかし月刊は停刊したが、郷土研究社はまだ存しており、この方面の著書を刊行している。今日に至って、私の知っている限り、郷土研究社叢書5冊、炉辺叢書約40冊を出している。（中略）柳田氏の学問の治めかたは素朴で飾り気がなく、文筆も精美で、読む気がそそられる。同輩の中で唯一早川孝太郎だけが比することができよう。早川氏は『三州横山話』（炉辺叢書）、『猪・鹿・狸』（郷土研究社叢書）などを著しており、何れもよく書けている。それは著者が画家でもある故、観察と描写は甚だ細密だからである。（周作人「遠野物語」1931年11月）

【資料2】（傳）芸子からの手紙では、貴兄は謡曲を研究なさるさうだが、能楽をききに行かれたかどうか。それも甚だよいが、若し勉強なさるならば、私の考へではやはり民俗学の方面に重きを置かれるのがよいと思ひます。蓋しこの学問は中国には甚だ缺乏してゐるし、また今ちようど要求されてもゐるのだから。柳田一派の学問は甚だ著実です。但し郷土研究は中国では恐らく当分発達を期し難いやうです、窃かに思ふに目下最も必要なことは外国の所謂文化人類学（FrazerがSocial Anthropologyと称するもの）であります。兄がもし公余にこれに従事されるならば、中国の学界に裨益するところ少なくないと思ひます（1942年1月28日周作人より方紀生宛書簡）

【資料3】「偶然にしてはよくも同じ時期に、同様の性質の民族学（ママ）運動の二つの雰囲気が東洋に現はれたではないか。光輝の明暗こそ異なれ、此の二つの雰囲気期せずして東洋に現はれたことは慶賀すべきである。此の二つの雰囲の洋々たる未来を想像せば私の希望は恍惚し、私の責任感が湧き出る。此の二大雰囲気の接近と融合を希望しつつ、大陸のそれを紹介することは

意味あることゝ思ふ」（何思敬「支那の新国学運動」1926年7月）

【資料4】何思敬中山大学民俗学会初期活動一部：

『中大週刊』「風俗研究」特集号（1928年1月）「巻頭語」、『民俗』週刊創刊号（1928年3月）巻頭論文「民俗学の問題」、『京報』副刊「妙峰山進香特集」序文（1928年4月）、民俗学会主催「民俗学伝習班」（1928年4月）で「民俗学概論」を講義

【資料5】『民俗学』中国関係内容

1-3「会員名簿」「学界消息」、2-11「関係出版物」、3-11「編輯後記」、4-3「編輯後記」、4-9「学界消息」、4-10「関係出版物」、5-1 巻頭論文婁子匡「中国民俗学運動の昨日と今日」、5-2「学界消息」「編輯後記」、5-1~4「民俗」週刊目次、5-5 婁文正誤表、5-6「学界消息」「広告」、5-10 巻頭論文石田幹之助「再び胡人採宝譚に就いて」、5-11 鍾敬文「中国民譚の型式」、5-12「関係出版物」

【資料6】『民俗学集鐫』第二輯日本関係内容

論文には周作人「遠野物語」の転載、秋子女史（陳秋帆、鍾敬文夫人）訳の田中香涯「巫娼考」（1931年5月15日訳）、鮑維湘訳の森鹿三「中国古代の山岳信仰」

「紹介」欄の冒頭に郷土研究社による『郷土研究』6-1（1932年3月1日）の要目、住所、定価。要目では、柳田の巻頭論文「年木・年棚・年男—正月行事の変遷—」以外、中山太郎、中道等、南方熊楠などの大物を挙げず、宮本常一を始め、口頭伝承を中心にピックアップしている。

『民俗学』4-1から4-6の要目、編集者、発行、定価。折口信夫「峯の雪」、中山太郎「農業歴」、岡本良知「へいさらばさら考」、饗庭斜丘「咒歌から俚謡へ」、中山太郎「箸の話」、李家正文「用桃避鬼考」、孫晋泰「蘇塗考」、南方熊楠「塩茄子の笑話」、折口信夫「年中行事」など、論文にあたるものを全部挙げている。

同仁名簿（134人）に唯一の外国人として「永尾龍造」の名前がみられる。

【資料7】『民間月刊』日本関係内容

2-3（1932年12月）で『民俗学』4-10、佐々木喜善の『民間伝承』1-2。

2-5（1933年2月）婁子匡「中国民俗学の昨夜と今晨」、佐々木喜善「日本にもNimfoがあるか」（寄稿、鍾訳）『民俗学』5-1、『麻尼亞』第3輯（『民俗学』4-12 麻尼亞創刊と1、2号情報）。

2-6（1933年3月）『民間伝承』1-3 予定要目、

2-7（1933年7月）『民俗学』5-6。

2-8（1933年8月）日本「新歌謡研究」2号喜多青磁「中国歌謡雑稿」で鍾敬文が集めた蛋歌の日本語訳

2-9（1933年9月）鍾の「中国民譚の型式」日本語訳自序、『民俗学』5-8、9

2-10・11『南方土俗』創刊、『民俗学』5-12